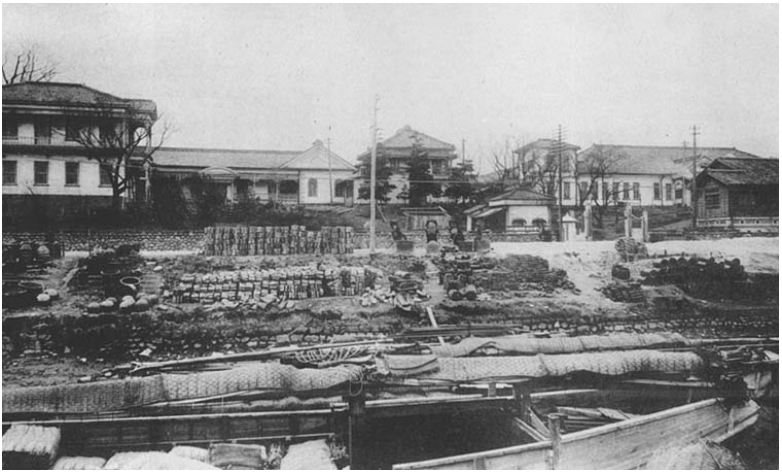
一　鶴舞キャンパス　―医学部医学科

◆明治四年仮医学校・仮病院の設置

現在の名古屋大学の中で一番古いキャンパスは、医学部のある鶴舞キャンパスです。それは名古屋大学において医学部が、一番古い伝統をもっていることと関係があります。

医学部は、一八七一（明治四）年八月に創設された仮病院と、続いて併設された仮医学校を前身としています。仮病院は名古屋藩の評定所跡（現在の名古屋市中区丸の内三丁目、愛知県産業貿易館本館）に、仮医学校はその西側、本町通を挟んで向かい側にあった、同じく名古屋藩の名古屋町奉行所跡（現同二丁目、同西館）に置かれました。仮病院は半年後の一八七二（明治五）年二月にいったん廃止され、仮医学校の方も同年八月の学制変革により廃校に及んだとされています。しかしこれは名古屋県の行政改革上の一時措置であったらしく、同年八月には仮医学校職員らの有志により「義病院」の名称で、同じ場所に再開されました。ただこの義病院も財政難から、翌一八七三（明治六）年二月には再び閉院されたとなっています。

しかし、病院復興の熱意は強く、愛知県権令井関盛良らの努力により、早くも同年五月には

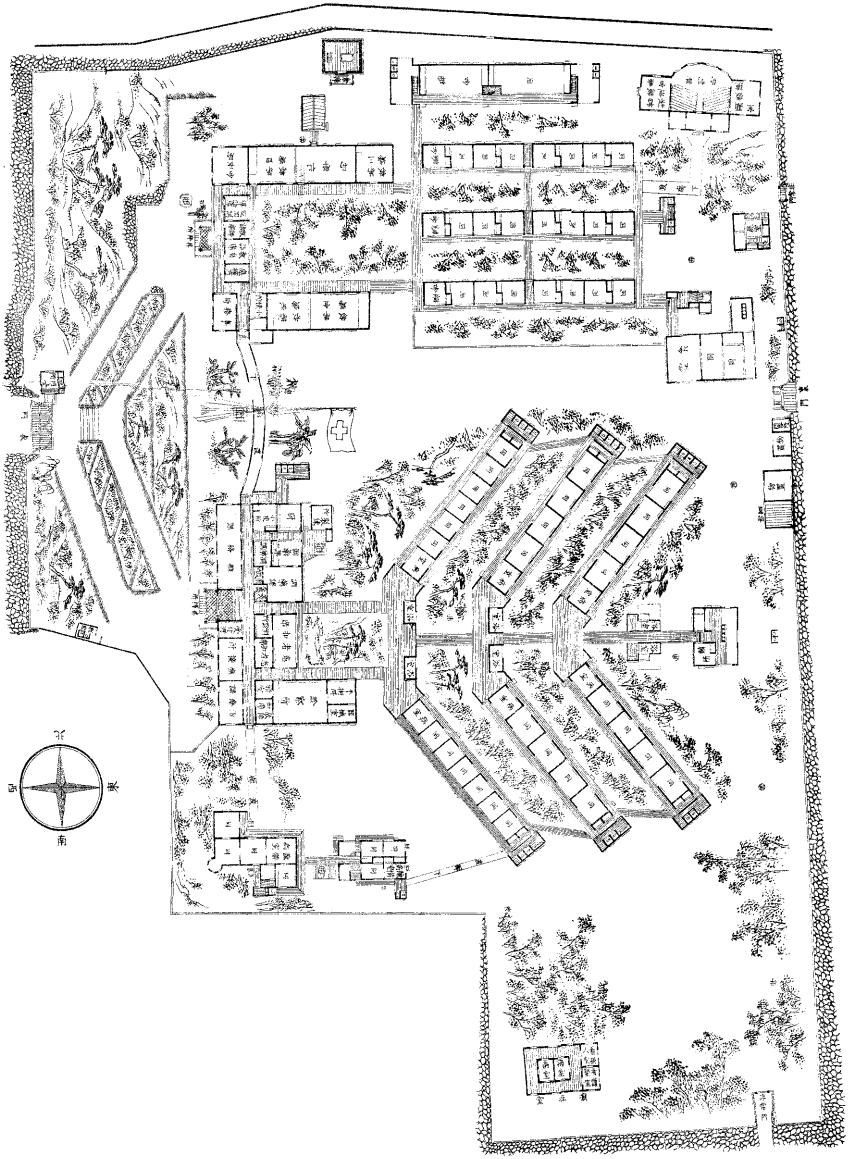


【図１】天王崎町にあった 1914 年頃の愛知県立医学専門学校
左（北）が学校、右（南）が病院、手前は堀川。

西本願寺掛所（現中区門前町一丁目、西本願寺別院）に病院が再興し、また医学校の方も未発足ながら、ヨングハンスほか一名の教師が迎えられました。同年一一月には医学講習場が正式に病院内に設けられ、医学校が名実ともに再興され、授業が始められました。

◆天王崎校舎と愛知県立医学専門学校

一八七七（明治一〇）年七月には、堀川東岸天王崎町にあった旧千賀氏屋敷跡（現中区栄一丁目）に医学校・病院ともに西本願寺から移転しました。それまでは既存の建物を修築して利用していたのですが、ここにはじめて、新築の医療と医療教育の専門施設を建てることができたのです。敷地面積は約二万平方メートルで、北側に医学校、南側に病院が配置されました。



【図２】天王崎町にあった 1880 年頃の公立病院・公立医学校の病棟・校舎図
上（北）が学校、下（南）が病院。

建物は診療棟一・病棟三・学校舎五（教場棟一・塾舎四）からなる木造建物でしたが、疑洋風建築で庭園樹木も設けられていました【図1・2】（前頁）。その後一八七九（明治一二）年六月に医学校はそれまでの三年六期の修学期間を四年八期に延長し、入学年齢も一五歳から一七歳に引き上げました。それまでの中等教育機関から、高等教育機関である「専門学校」に格上げされたのです。さらに一九〇三（明治三六）年三月の専門学校令と公立私立専門学校規程の公布により、愛知県立医学専門学校（愛知医専）と改称しました。なおこの間、医学校・病院ともに名称変更が何度かありましたが、これについては【図3】を参照して下さい。

◆校舎移転と大学昇格問題

天王崎校舎は明治二〇年代後半から三〇年代にかけて若干の増改築が行われてきましたが、明治四〇年前後になると、施設・設備が約三〇年近くも経って老朽化してきたことから、校舎の新築移転が本格的に考えられるようになりました。ただこの移転問題には、もう一つ大きな理由がありました。この明治末年頃から、単に高等教育をうけるだけではなく、学士号を取得できるようにという要望が、生徒から出されるようになりました。もとより大学当局もこれに否定的ではありませんでしたが、学士号取得＝大学昇格のためには現状の施設・設備では不十分であり、その拡充がまずは先決であるという認識がありました。これが校舎移転のもう一つ

年　月	名　称		場　所
	学　校	病　院	
1871(M 4). 8		仮病院	旧評定所
	仮医学校	↓	旧町奉行所
1872(M 5). 2	↓	×	
	↓		
. 8	×	義病院	旧評定所再置
		↓	
1873(M 6). 2		×	
. 5		仮病院	西本願寺掛所
.11	医学講習場	↓	
1875(M 8). 1	↓	愛知県病院	
	↓	↓	
1876(M 9). 4	公立医学講習場	愛知県公立病院	
	↓	↓	
. 6	公立医学所	↓	
1877(M10). 7	↓	↓	天王崎町・旧千賀氏屋敷跡へ移転
	↓	↓	
1878(M11). 4	公立医学校	↓	
1881(M14). 9	↓	愛知病院	
.10	愛知医学校	↓	
	↓	↓	
1901(M34). 8	愛知県立医学校	↓	
	↓	↓	
1903(M36). 7	愛知県立医学専門学校	↓	
1914(T 3). 3	↓	↓	現鶴舞キャンパスへ移転
	↓	↓	
1920(T 9). 7	県立愛知医科大学	↓	
1922(T11). 7	↓	愛知医科大学病院	
	↓	↓	
1924(T13). 5	↓	愛知医科大学附属医院	
	↓	↓	
1931(S 6). 5	官立名古屋医科大学	名古屋医科大学附属医院	
	↓	↓	
1939(S14). 4	名古屋帝国大学医学部	名古屋帝国大学医学部附属医院	
	↓	↓	
1947(S22).10	名古屋大学医学部（旧制）	名古屋大学医学部附属医院	
	↓	↓	
1949(S24). 4	名古屋大学医学部（新制）	名古屋大学医学部附属病院	

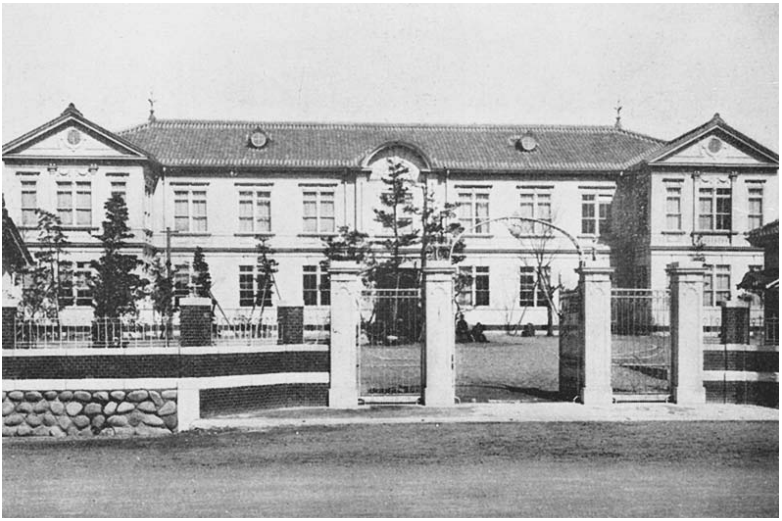
【図３】医学部前身校の沿革

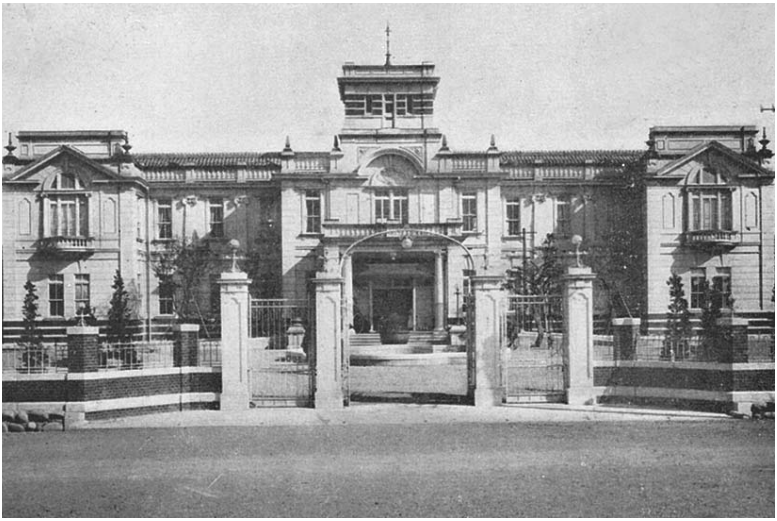
の理由です。

県当局の方も校舎の移転を検討していましたが、一方で県議会は経費の削減からこれに積極的ではありませんでした。しかし、明治四〇年代に入ると大学昇格、それも官立大学へ移管すれば、県の財政負担がなくなるという可能性もでてきたため、その前提となる施設・設備の拡充＝校舎移転に賛成するようになったのです。このように、その後展開される官立大学への昇格実現のための大きな布石＝前提として、校舎移転は企図されたのです。

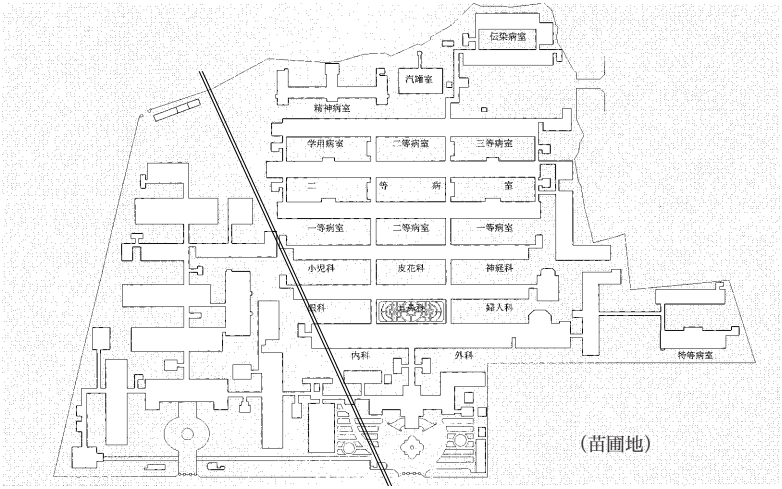
◆鶴舞キャンパスへの移転

一九一四（大正三）年三月、愛知医専は天王崎校舎から中区（現昭和区）鶴舞町の鶴舞公園に隣接した敷地に移転しました。現在の鶴舞キャンパスです。総工費約七〇万円、敷地面積は六万一〇〇〇平方メートル余、建物面積で約二万九〇〇〇平方メートル余になりました。敷地面積で天王崎町のほぼ三倍に広さになりました。西三分の一を学校、東三分の二を病院が占め、正門も東西二つあり、それぞれの正門と玄関の間にはロータリーが置かれました【図4】。学校は正面に本館、その左右に校舎二棟が広がり、その奥に校舎八棟がありました。一方病院の方も、南から本館が一棟、診察棟が三棟、その北奥に二階建ての病棟が大小あわせて八棟もある大施設でした。木方十根さんの研究によれば、東南側は鶴舞公園に隣接しており、そこは公





【図４】1914 年（上）愛知県立医学専門学校正面（下）愛知病院正面



【図５】1914年移転当初の鶴舞キャンパス図
二重線より左（西）が学校区域、右（東）が病院区域。学校が前（南）に広く出ており、病院が奥（北）に入っています。

園用樹木の苗圃地になっており、南の公園本体および東の名古屋高等工業学校と、病院とを覆い隔てる緩衝緑地帯の役割をしていたということです。さらに東西に分かれてはいたものの、学校部分は公園側に近い南部分に広く、病院部分は逆に公園から遠い北側部分が広いという配置になっていたとも述べられています。公園を市民の憩いの場としておいてみると、この時期の学校に対する肯定的認識と、病院に対する否定的な認識が窺えます【図５】。

◆県立愛知医科大学

大学昇格への大きな追い風となったのが、一九一八（大正七）年二月に制定公布された「大学令」です。当時日露戦争から第一

次世界大戦にかけて大きな経済発展を遂げていたのですが、それと比例してこの時期高等教育の重要性が主張されるようになりました。その結果として高等学校令の改正とともにこの大学令の制定が行われ、以後大学や高等学校（旧制）の増設がさかんに行われるようになりました。

これにより一九二二・三（大正一一・二）年の二年間に、新潟・岡山・長崎・金沢・千葉にあった五つの官立医学専門学校は官立医科大学に昇格しました。これと並行して、愛知県立医学専門学校が一九二〇（大正九）年六月に、京都府立医学専門学校は翌年、それぞれ（県立）愛知医科大学・京都府立医科大学へと、大学に昇格しました。

愛知医専は当初「官立大学」、すなわち「県立から官立への移管」と「大学昇格」を同時に行うことを目標としていました。しかし文部省はこれを受け入れなかったため、愛知医専は県立のまま単に大学昇格を実現するという方針に転換し、まずは大学昇格を実現したのです。そのため官立移管問題は検討課題として、その後も残りました。

なお、この大学昇格後に施設増築のため敷地拡張を行い、一九二三（大正一二）年頃には約八万五〇〇〇平方メートルとなり、一部北東部を欠くものの、ほぼ現在の台形型に近い敷地にまで広がりました。先の木方さんは、東南部にあった樹木の苗圃地には臨床講義室・外来患者診療場が建てられ、病室もありましたがそれは「特等病室」であり、逆に北側奥の拡張部分には精神病棟と伝染病棟がたてられたと指摘しています。前述した当時の認識がここにも表れています。

◆官立名古屋医科大学から名古屋帝国大学医学部へ

官立への移管問題は、愛知医科大学設置後一時、名古屋に総合大学＝帝国大学を創設する運動が高まりをみせたため、その中に吸収されていた感がありましたが、この運動が停滞・行き詰まりをみせると、再び愛知医科大学の官立移管運動が再開されました。最終的に一九三一（昭和六）年五月に官立移管され、名称を変更、名古屋医科大学となりました。なお、官立医科大学には附属図書館を設置することが定められていたため、この時に近代的鉄筋コンクリート三階立て、講堂をあわせもった附属図書館も建てられました（開館は翌年三月、【図6】参照）。

「大学昇格」と「官立移管」を達成した以上、あとは「総合大学」＝「名古屋帝国大学」の創設だけが最後に残された課題となりました。具体的には、名古屋医科大学を基にした医学部と、戦時下で軍事用技術の優先ということもあって理学部・工学部を加えた、三学部からなる総合大学創設案でした。この創設運動は官立移管直後から開始され、紆余曲折を経た後、一九三九（昭和一四）年四月に医学部と理工学部の二学部からなる名古屋帝国大学（名帝大）が創設されました。

◆空襲と疎開

しかし創設六年後の一九四五（昭和二〇）年、鶴舞キャンパスは空襲により多大な被害をう

【図６】1945年空襲直後の名帝大医学部鶴舞キャンパス（名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵）
中央で焼け残っているのが図書館。

けます。空襲は三月一二日・一九日・二五日の三度あり、前二日は医学部が、後一日は附属病院が大きな被災をうけました【図6】。焼失率は医学部が九七・二％、附属医院が五一・三％で、附属図書館と病院半分を残すのみとなってしまいました。その後当時の文部大臣の視察があり疎開を促され、医学部の特殊戦時研究施設や薬品・器具などを、愛知県瀬戸市や岐阜県瑞浪町などへ漸次移してはいきました。しかし経費の問題もあり、順調にはいかなかったようです。

ただその後も空襲は度重なり続き、病院は名古屋市民の治療機関でもあったため、疎開よりはむしろ、空襲で被害にあった数多くの負傷者の治療にあたら

なければなりませんでした。

◆東山移転構想と薬学部構想

一九四六（昭和二一）年五月頃に考えられたと思われる復興計画では、医学部は東山キャンパスに移転し、既存の附属医院は分院として鶴舞に残すというものでした。ただ医学部の東山移転自体は全く新しいものではなく、名古屋帝国大学創設当初から構想されていたことでした。戦前の東山キャンパス計画図によれば医学部は附属病院とともに、現在の理学部・農学部から農学部農場を経て、共通教育研究施設（旧核融合科学研究所跡地）に至るまでの広大な敷地に、建設計画されていました。しかし、一方で同年七月の復興計画では医学部の応急建物を鶴舞に新営するとあり、また一一月頃に策定されたと思われる応急復興計画でも三ヶ年の予定で旧敷地（＝鶴舞キャンパス）に応急建物を新営するとあり、この段階でも東山移転はあくまで計画＝構想でしかなかったと思われます。

そのためその後も、鶴舞キャンパスで復興がおこなわれていきましたが、東山移転構想も全く立ち消えたわけではありません。一九五一（昭和二六）年一月に行われた第二回整備計画委員会において、医学部のうち基礎系教室を東山キャンパスに置き、附属病院はそのまま鶴舞に置くことが、あいかわらず検討課題として残されていました。さらに一九六二（昭和三七）年

九月の同委員会においては、東山キャンパス理学部の木造校舎建物地区を医学部の予定地区として充当することが提案されました。また翌年にも医学部長から学長宛へ東山移転の要望書が出されています。

これは医学部の教育・研究部門を東山で行い、あわせて理・農・医の各学部が共同・連携して研究もできるようにし、鶴舞には臨床治療の関係部門を残す構想でした。ここでは病院は市内中心に、学校（この場合は「医学研究」＝大学といった方がよいでしょうか）は郊外にといった認識が窺え、前述した「学校は近くに、病院は遠くに」という戦前の認識とは、全く逆転していることがわかります。

なおこの過程で歯学部・薬学部構想も出され、実際一九六五（昭和四〇）年に薬学部設置の概算要求が文部省に出されています。この要求は認められなかったものの、この時構想された薬学部は、先の理・農・医の三学部だけではなく、工学部・教養部の教員の研究分野の連携・共同を組織するという意図も見うけられ、医学部東山移転計画の延長線上にあるものであったと思われます。

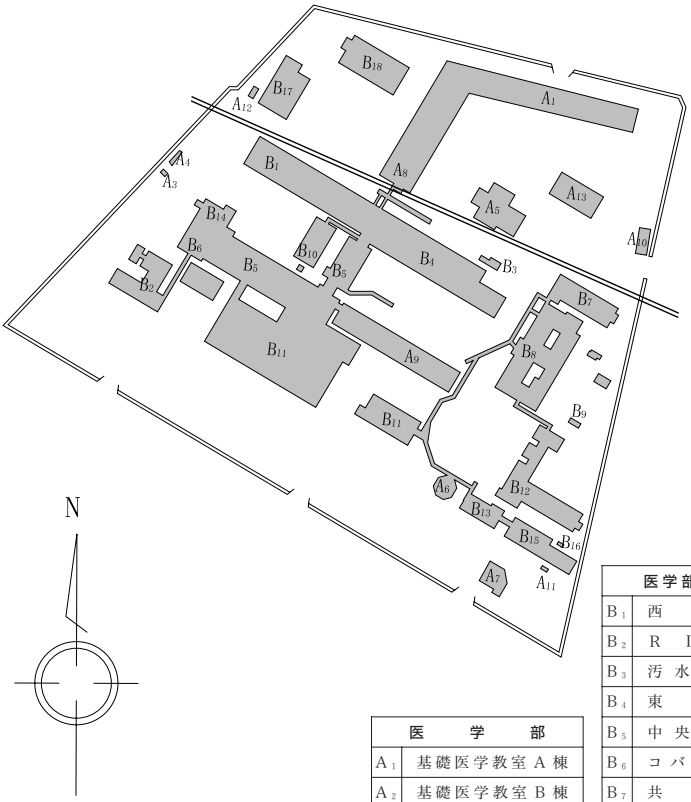
◆敗戦後の復興と建物の増改築

一九四五（昭和二〇）年八月一五日の敗戦後、鶴舞キャンパスは早急に復興にとりかかりま

す。医学部は千種区田代町にあった愛知県有の青年教育施設である昭和塾堂（現名古屋市千種区城山町、城山八幡宮内愛知学院大学大学院研究棟）の転用をうけて授業を開始し、病院も知多郡河和町・豊川市・岡崎市などにあった旧海軍の建物を鶴舞へ移築し、病室などに利用しました。

その後建物を増改築していくなかで徐々に、東西であった病院・医学部の配置を、北に医学部、南に病院という現在の配置に変えていきました。戦前には病院区域が北奥、学校区域が南手前に広いという配置でしたのが、全く逆転してしまいました【図7】。病院と学校＝大学に対する認識の変化をここでも窺うことができます。これは、それまでの伝染病に対する忌避認識と病院とが一体視されていたのが、戦後結核におけるストレプトマイシンの開発など医療技術の飛躍的向上により、伝染病が減少していくのとともに、病院が肯定的なものと認識され、他方大学は教育的側面より病原菌研究など医学研究的側面が強く認識され、それに対する不安感が増大したためと考えられます。戦後における社会認識の転換の一側面が窺えます。

なお敷地も、多少の増減を経緯したものの、周辺の土地を併わせていき、一九七〇（昭和四五）年には、現在の台形型の敷地になりました。そしてこの一九九九（平成一一）年には、南正面に高層建築一四階立ての新病棟が全館完成し、景観は一新しました。



医学部	
A1	基礎医学教室A棟
A2	基礎医学教室B棟
A3	動物飼育室
A4	危険物倉庫
A5	図書館・講堂
A6	講義室
A7	記念館・学生ホール
A8	事務室
A9	臨床医学教室
A10	警務員詰所
A11	RI焼却炉
A12	倉庫
A13	アイソトープセンター

医学部附属病院	
B1	西病棟
B2	RI診療室
B3	汚水ポンプ室
B4	東病棟
B5	中央診療施設
B6	コバルト治療室
B7	共済会館
B8	看護学校・助産婦学校寄宿舎
B9	ポンプ室
B10	高気圧治療室
B11	外来診療棟
B12	看護婦宿舎
B13	第2号病棟
B14	リニヤック治療室
B15	第1号病棟
B16	アイソトープ貯蔵庫
B17	中央動力室
B18	各種学校

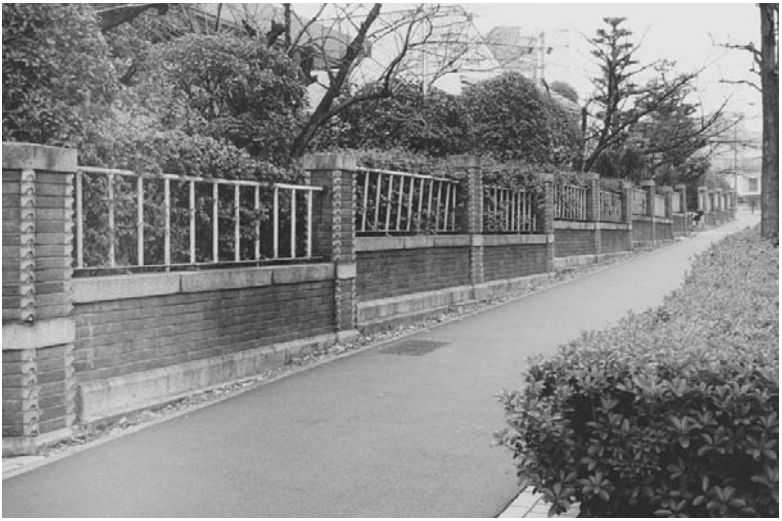
【図7】1973年鶴舞キャンパス図

二重線より上（北）はA大学区域が主、下（南）がB病院区域が主。【図5】とは逆に病院が前に、大学が奥になっています。

◆鶴舞キャンパスの歴史的景観

鶴舞キャンパスは戦災にもあっており、また病院という性格上、建物の改装改築は避けられないこともあって、長い歴史をもちながらも、戦前の様子を伝える建物はほとんど残っていません。鉄筋建築であった附属図書館は戦災を免れていたのですが、医学部創立百周年記念として、一九七一（昭和四六）年三月に、鉄筋建物に建て替えられてしまいました。最後の戦前建築であった看護学校・助産婦学校寄宿舎も一九九八（平成一〇）年に取り壊わされてしまいました。

現在、往時の歴史を伝えるものとして残っている建造物は、残念ながら正面三ケ所の門柱と外塀の一部（東南側、鶴舞公園方向）のみです。正門は愛知医専時代からのものですが、外塀は一九三〇（昭和五）年に改修されたものです。しかしスクラッチタイルとテラコッタによって仕上げ直された様子は、材料的にもデザイン的にも昭和初期の特徴を、門柱とともによく伝えています【図8】。



【図８】現在の鶴舞キャンパスに残されている（上）門柱と（下）外塀